

書評

「村は次々と災難に見舞われた—ヨブ記のように— —ミレニアム・ビレッジの悲劇—

福田 幸正
主任研究員
(公財) 国際通貨研究所

Nina Munk, 2013, *The Idealist: Jeffrey Sachs and the Quest to End Poverty*, New York, Doubleday,

本著は6年間にわたりジェフリー・サックスを密着取材したアメリカ人女性記者ニナ・ムンク (Nina Munk, *Vanity Fair* 誌) によるサックスとアフリカの貧困の正体に迫る手記。本著は、本年9月の発表と同時に、WSJ、CNN、*Foreign Policy*、CSMなどの主要メディアに取り上げられ、*Forbes* 誌の *The Best Books of 2013* にも名を連ねている。

ご存知の通り、サックスは、援助の大量投入 (ビッグプッシュ推進論) によって貧困撲滅は可能と強力に主張するコロンビア大学の経済学教授。国連事務総長の特別アドバイザーとしても、MDGsの推進に大きな役割を果たしてきた。

サックスは、彼の持論を実証するために、アフリカ10カ国で10数カ所の寒村を選び、MDGsに因んで *Millennium Village Project (MVP)* と称したパイロット事業を立ち上げた。第1フェーズ (5年間: 2006~2011年) の所要資金120米百万ドルのうち、ジョージ・ソロスのオープンソサエティ財団も50百万米ドルを投じた。

保健所を建て、医者、薬品を手当てし、予防接種を行い、マラリア予防の蚊帳を無料配布する。肥料と種を配布する。学校を建て、教師を手当てし、給食も提供する。このように公衆衛生、農業、教育に援助を同時に集中投入すれば、貧困の罠から這い上がり自立的な成長軌道に乗ることができるはずだ、というのがサックスの主張。このパイロット事業が成功すれば、MVPをアフリカ全土にスケールアップするという目論見だ。

当初、ムンクは、サックスの単純明快な議論に惹かれて密着取材を始めたが、サックスについて (後に独自に) アフリカに足を運ぶごとに、サックスの理論とアフリカの貧困の現実との間の大きなギャップに気が付き始める。また、サックスの、批判を寄せ付けない異常ともいえる傲慢さを垣間見る。

ムンクは特にソマリア国境近くのケニアの寒村 (Dertu) とウガンダの寒村 (Ruhira) を取材の対象とし続けた。当初、MVP は顕著な進捗を示した。初期条件が劣悪なことから当然だ。藁ぶき屋根はトタン屋根に葺きかえられ、保健所、学校も建設が始まり、目に見えて村の様子は良くなってきた。しかし、その後想定しなかった事態が次々と起こる。

たとえば：

- 肥料のおかげでトウモロコシの豊作となるのだが、そのせいで価格が暴落、買い手がつかず、また倉庫がないので屋外はもとより家の中までトウモロコシが積み上げられた。そうしたら鼠が大発生してしまった。
- ラクダの取引市場施設を作ったものの、まったく使われることはなかった。遊牧民にとってラクダは人間よりも大切な財産であり、自分の手元から手放し、市場施設に保留することはない。
- マラリア予防用に蚊帳を無料配布したが、家畜用に使われてしまった。家畜の方が人間よりも大切にされているからだ。
- 住居を複数構え、食糧配給をダブルで得る村人が増えた。

一旦始まるととどまることを知らないのが人間の欲望だ。村人の非現実的な要求はどんどん膨らんでいく。ところが、MVP は室の小槌ではない。高まりきってしまった村人の期待をいかに御していくか、いかに自助努力の精神を培っていくかが MVP 現地スタッフの深刻な頭痛の種となっていく。

そして、水と電気の慢性的な欠乏。特に水がなければ何も始まらない。こんな状況で、5年間で自立段階に入れというのはどう考えても無理だ。そんな MVP 現地スタッフの悲壮な声も MVP のニューヨーク本部には届かない。そればかりか、援助依存から民活に移行するための具体的なビジネスプランの策定指示が厳しく矢のように飛んでくる。もっともらしい企画書がなければ、投資家や慈善家から募金が集まらないのだ。

村人の中からも MVP に対する不満が出てきて、それがケニアの国会議員に届けられてしまう。

- MVP は村民の自主性を尊重することを旨としていたはずだが、MVP 現地スタッフに牛耳られ、村民の援助依存体質を助長している。
- 透明性、説明責任の欠如。
- MVP の指示は 100 キロ離れた支部からなされているので、交通費に事業費の多くが消費されている。
- 女性のエンパワメントが無視されている。
- 資質に欠ける MVP 現地スタッフ。

- MVP は外部からの訪問者と村民の交流を避けている。などなど。

そんな中、希望に胸を膨らませ献身的に難題解決に取り組んできた Dertu 村の MVP 現地責任者が突然解雇されてしまう。ことがうまく進まなくなった中での上記のような村人の不満の鬱積が背景にあるようだ。資金の不正使用も噂されたが、はっきりしたことはわからないまま一方的に MVP 本部から解雇され、本人は途方に暮れてしまう。

そうこうするうちに、干ばつが襲い、それに加えて、隣国ソマリアの情勢が悪化し、Dertu 村を含む地域はソマリアのイスラム武装集団に占拠されてしまう。同じころ、西アフリカのマリでも、イスラム武装集団に MVP 対象の寒村が占拠され、破壊されつくしてしまった。この書評のタイトル「村は次々と災難に見舞われたーヨブ記のように」は、Dertu 村の顛末を振り返りサックスが吐露した言葉だ。旧約聖書に出てくるヨブは、信心を試す神の厳しい試練に苦しむ人物。

現場ではこのような困難に直面したが、MVP の効果に関する対外的なプレゼンテーションが甘かったので、厳しい批判に晒された。サックスの事業であるにもかかわらず、基本的な評価の仕組みが当初から組み込まれていなかったのだ。コントロール・グループを設定することは人道的に問題、というのがサックスの口実だった。

MVP は規模を縮小して第 2 フェーズに入った模様だが、詳細は書かれていない。

本著は、途上国の貧困の複雑な実際を伝えているところが痛々しくも大変興味深い。しかし、なぜ本著は冒頭で述べたように欧米メディアの注目を集めているのだろうか？サックスはハリウッド女優アンジェリーナ・ジョリーやロックスターのボノなどとも交流し、セレブのように扱われてきた。そんな華麗な有名人経済学者が、芸能雑誌の無名の一女性記者にこきおろされるのは、低俗だがおいしいゴシップだ。しかし、それだけだろうか？著者が意図しているか否かはさておき、一見もっともらしいサックス批判の延長線上に、開発を冷笑し、その努力をないがしろにしようとする闇のようなものを感じることはできないだろうか？サックスが好きか嫌いかは別にして、広がりつつあるサックス・バッシングの尻馬に軽々しく乗ってはいけない。

鳴り物入りで打ち上げられた MVP だけに、このような結果になってしまったことは大変残念だ。そうであればこそ、本著の内容を、今度は本当の開発のプロが一つ一つ検証することが切に望まれる。そのうえで、あらためて MVP 2.0 を打ち上げればよい。